

初期俳諧における『論語』の撰取について

吉 田 健 一

はじめに

初期俳諧の中心人物であった松永貞徳の生年は元龜二年（一五七二）、没年は承応二年（一六五三）と言われている（『俳文学大辞典』）。その貞徳の句に「酒の朋遠方よりやきくの宿」（『崑山集』六二〇九）⁽¹⁾がある。この句は、次に述べる通り、和歌・連歌との連続性を保っているとともに、それらには見られない特徴を有している点において、初期俳諧を象徴する句といつてよいと思われる。

まず、和歌・連歌との連続性については、縁語及び掛詞の使用が挙げられる。上句の「酒」と下句の「きく」（菊）とは重陽の節句に菊酒を飲んだことから縁語の関係にある。貞徳より少し後の延宝四年（一六七六）に刊行された高瀬梅盛撰『俳諧類船集』⁽²⁾においても、「酒」の付合語の一つとして「菊」が挙げられている。この「きく」は「菊」であるだけでなく、「酒を聞く」の「聞く」でもあるし、「きく」の「き」は「朋遠方より来れる」の「来」⁽³⁾でもある。つまり、「き（く）」は掛詞として用いられている。さらに、句末の「きくの宿」は秋という季

節を提示するとともに、『類船集』の「宿」の項に「わか宿の菊の白露ともよめり」とあるように、「わが宿の菊の白露けふごとにかく世つもりて淵となるらん」（『拾遺集』・秋・一八四・藤原元輔）⁽³⁾という歌を思い浮かべさせる仕掛けになっている。

このように、「酒の朋」の句は、縁語・掛詞を駆使し、読む者に季節を感じさせ、さらに古歌を思い起こさせるといふ点で和歌や連歌との連続性が見られるが、それらには見られない特徴もある。それは、「遠方」という漢語の使用である。これは「をちかた」と訓読みすることもできるが、この句では「朋遠方より」となっており、『論語』⁽⁴⁾学而第一にある「有朋自遠方来」（朋遠方より来れることあり）⁽⁴⁾に由来することが明らかなので、「えんぼう」（えんほう）と音読みで読む漢語として取り込んだものと思われる。この漢語を取り入れた表現は俳諧に必要な「俳言」と見ることができ、俳言を句の中に取り入れることにより、和歌以来の優美な言葉の連続とは違った不調和や、時によつては違和感あるいは緊張感といったものが生み出されることになり、そこに初期の俳諧作者たちは和歌や連歌には見られない一種のおかしみを感じたのであろう。⁽⁵⁾

このような特性を持つ初期俳諧、とりわけ貞門の俳諧について、加藤定彦の「俳諧の誕生」に次の記述がある。

貞門の俳諧観は、「凡そ、誹諧句体は、連歌に俗語を加へて、前句の詞をあらぬ品に取成して付け侍るさまなり」（『誹諧初学抄』）という「徳元説」、あるいは「連歌は景物を本とし、俳諧は世諺（世俗の言葉）を本とす」「誹諧は即ち百韻ながら俳言にて賦する連歌なれば」（『増山井』）（季吟跋）と祖述される貞徳の俳言説に代表される、つまり、貞門時代の俳諧は中世の畳字（異体）連歌の系譜をひくもので、俳言とよぶ俗語・漢語を歌語の雅文調の中に投入、その不調和から生まれるおかしみを専らとし、また俳言を次々と賦し続けることにより句の連鎖も可能となる。…（一部、省略）…また、「前句の詞をあらぬ品に取成して付け侍る」という技法は、貞門の俳諧がやはり「懸詞（秀句）」に代表される言語遊戯を専らとした証拠にはかならない。

こう述べた上で、貞門の代表者である貞徳自身の作風を「懸詞・諺・本歌本説などに着想した句が多く、主知的な作風である」と評している。「酒の朋遠方よりやきくの宿」はまさに加藤氏の評言通りの句と言うことができよう。

貞徳のこの句に限らず、初期俳諧には『論語』中の語を取り込んだ句が見られる。その取り込み方を見ると、この句のように『論語』の読み下し文の中の語句がそのままに近い形で使われていることが多い。

一方で、『論語』からの取り入れは、貞徳とほぼ同じ時代の日本の漢詩にも見られるが、初期俳諧の場合とは違いがある。江戸時代初期

の漢詩の場合は、『論語』や儒学の精髓を作品に取り入れようとしたのであり、俳諧に見られるような「おかしみ」を生み出すために、換言すれば一種の言語遊戯として『論語』を取り込もうとしたのではない。取り入れようとする章段から字句を切り取って詩の中に嵌め込み、その字句を『論語』中の典故や孔子及び高弟の教え等を引き出すキーワードとして用いていると思われる。

本論では、初期俳諧における『論語』の撰取と江戸時代初期に日本で作られた漢詩による『論語』の取り入れとを比較検討することにより、初期俳諧による『論語』撰取の特徴を明らかにしたい。なお、本論で扱う初期俳諧とは、概ね貞徳、彼を始祖とする貞門派及びその少し後に起こった談林派の俳諧を指すものとする。

一、初期俳諧における『論語』の撰取

(一) 初期俳諧時代の『論語』のテキスト

初期俳諧時代の俳諧作者たちは『論語』をどんなテキストによって読んでいたのだろうか。このことに関連して、呉美寧「室町末期・江戸初期の論語集注本における古注の影響」元亀本・寛永本・寛文本を対象として⁶⁾は、「室町時代まで、論語のテキストは古注本即ち、論語集解本が主流であった。それが室町時代末期になると、宋学の普及や出版文化の拡散により、新注本即ち、論語集注本へと交代することになる」とする。ただし、音読の際の読み方に関しては、「論語テキストの交代期の集注本が、集注本でありながら、加点された訓には、それまでの訓読の影響、つまり、古注による訓が見られることに

注目」して、春永筆の元龜四年（一五七三）本（桂庵点）、静嘉堂文库蔵の寛永三年（一六二六）版本（文之点）、内閣文库蔵の寛文四年（一六六四）版本（道春点）の『論語集注』を比較し、林羅山の点が施された寛文本に至っても古注の訓読に用いた清原博士家の読み方がまだ残っていたことを指摘している。

この呉美寧論文にあるように、室町時代末期に古注本から新注本への転換が行われているので、貞徳を始め、初期俳諧に関わった者たちの多くは、内容は朱熹の新注によりながらも訓点は古注による読み方の影響が残るテキストによって『論語』を読んでいた可能性が高い。ただ、具体的にどの抄本・板本を読んでいたのかまでは確定できないので、この論文では、初期俳諧に撰取された『論語』の章句の読み方の基準として、貞徳の時代に比較的近い時期に作られたとされる足利市鏝阿寺蔵本の『足利本 論語抄』を目安とする。この本の成立時期については、断定することは難しいが、足利学校第七世座主九華の六〇歳前後、即ち永祿三年（一五六〇）頃の自筆本と推定されている⁹。内容は古注派の総帥とも言うべき清原博士家の読み方及び解釈を踏襲している。

(二) 初期俳諧による『論語』の撰取の具体例

『論語』を撰取した初期俳諧の句例を挙げる。『論語』と関連があると思われる初期俳諧の句のうち、ここでは『論語』からの取入れである可能性が高いもの一四句を示す。句には振り仮名や正しい歴史的仮名遣いによる表記を付す。句の次の行に対応する『論語』の章句を『足利本 論語抄』の訓点によって示す。

① 引用箇所にも音読み語が出てくる例

- A 夕にはしす共蚊なり夏のむし 宗朋（『鷹筑波』三五〇）
朝聞道、夕死可矣（里仁第四）
「蚊なり」は音読みみの「可」を含む「可なり」の変形である。
- B 職のいとまもとむる夜半の銭湯に（『正章千句』七三三）
君子食無求飽、居無求安（学而第一）
「職」は音読み語の「食」の変形である。
- C 賢を色にかへて妻こふや子夏の声 友久（『続山井』四九六七）
子夏曰、賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身（学而第一）
「賢賢易色」の「賢」は『足利本 論語抄』では「カシコキ」と読まれているが、この句では鹿の鳴き声から「ケン」と読む。
- D 一もつてくはんとうの代や君が春 松村吟松（『桜川』二七）
子曰、參乎吾道一以貫之哉。曾子曰唯（里仁第四）
美尽せり銀盤を打て水仙花 不花（『談林功用群鑑』四四二）
子謂韶尽美矣、又尽善也。謂武尽美矣、未盡善也（八佾第三）。
- E 色にかへよ賢を賢として四方の山 桐陰（『談林功用群鑑』四七一）
出典はCと同じ。
- F 礼をもつてせずんばあらじ今日の春 井手正倫（『桜川』六六）
子曰、導之以政。齊之以刑、民免而無耻。導之以德、齊之以礼、有耻且格（爲政第二）
- G 朋友とまじはるにすぎ新酒哉 道之（『続山井』五〇三二）
- H

曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、與朋友交、言而不信乎、傳不習乎（学而第一）

I 網にかかる天命をしれ五十雀 保友（『続境海草』九九九）

子曰、吾十有五而志于學……五十而知天命（爲政第二）

J 不仁者もみてや楽しむ山桜 友久（『続山井』二一九七）

智者樂水、仁者樂山（雍也第六）

「不仁者」は里仁第四に「不仁者不可以久処約」として見える。

② 訓読み語を引用した例

K うむことをはばかる中にはらむらし 康吉（『続山井』七六一）

子路問レ政、子曰先レ之勞レ之。請レ益曰無レ倦（子路第十三）

+ 過、則勿レ憚レ改（学而第一）

L 古きもつて新しき知る若葉哉 厚成（『ゆめみ草』八七二）

子曰、温レ故而知レ新、可レ以爲レ師矣（爲政第二）

M 本立て道生物やかどの松 道節（寛永一九年（一六四二）『歳

旦発句集』四二一及び『崑山集』一五四）

君子務レ本。々立而道生。孝悌也者爲レ其仁之本（與（学而第一）

この句の「道生物」はこれに対応する『論語』本文の読み方から見て、「みちなるもの」と読むと思われる。

N 遊者はかくのごときか年わずれ 空存（『ゆめみ草』二二六七三）

子在二川上二曰、逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜（子罕第九）

初期俳諧による『論語』撰取の特徴の一つは、「①引用箇所を音読み語が出てくる例」にまとめた通り、Hの「朋友」やIの「天命」のように漢語（音読み語）の取り込みが多く見られることである。漢語

は今挙げた二字（朋友、天命）のものほか、一字（賢、美、貫、礼）や三字（不仁者）のものもある。『論語』の読み下し文には訓読みの部分もあるので、「②訓読み語を引用した例」におけるLの「古きもつて新しき知る」やMの「本立て」「道生」のように訓読み語として取り込む例も見られる。しかし、ここに挙げた一四例以外においても、和歌や連歌ではあまり見られない①の「音読み語」の取入れの方が多く見受けられる。

さらに、『論語』取り込みの例として挙げた句から分かることは、初期俳諧における『論語』撰取のもう一つの特徴が、引用箇所を音読み語が出てくる例及び訓読み語を引用した例のいずれにおいても、『論語』の章句の読み下しをそのままの形で、あるいは多少変えただけの形で取り込んでいることである。たとえば、Aの「夕にはしす共蚊なり」は里仁第四の「夕ニ死トモ可ナリ」を一部変えただけの形で取り込んでおり、また、Lの「古きもつて新しき知る」も爲政第二の「故キヲ温 新ヲ知バ」とほとんど同じである。他の例もほぼ同様である。また、Aの「蚊なり」は『論語』本文の「可なり」を掛け、同様にBの「職」は『論語』本文の「食」を、Cの「子夏」は「鹿」を、Dの「くはんとう」は「巻頭」及び「閑東」を掛けている。このように、引用箇所を音読み語が出てくる例においては掛詞を用いることがあるが、このことは訓読み語を引用した例にも見られる。Kの「うむ（産む）」は『論語』本文の「倦む」を掛けている。なお、Kの「うむ（産む）」は「はらむ」、Lの「新しき」と「若葉」は縁語の関係になっている。このほか、Kのように『論語』の二つの章から取り込むこともある。総じて言えることは、初期俳諧における『論語』の撰取は、その章

句を読み下しに沿った形で取り込んだものであり、その目的は和歌や連歌では採用されることの少ない『論語』という素材や音読み語である漢語（俳言）を句の中に取り入れることにより、敢えて作品の調和を破って「おかしみ」を生み出すことであつた。従つてここでは「論語」あるいは儒学への深い理解は必ずしも必要とはされなかつたのである。

二、中国の漢詩による『論語』の引用

初期俳諧と同時期の日本で作られた漢詩による『論語』摂取の特徴を見る前に、中国の漢詩による『論語』の引用の特徴を見ておこう。ここでは『古詩源』⁽¹²⁾及び『唐詩選』所収の作品の中から、二人の詩人の作品を取り上げることとする。

まず、『古詩源』を見ると、東晋末から南朝宋時代の詩人である陶潜が『論語』から多数引用していることが見て取れる。このことについて、『古詩源』の撰者の沈德潜は「晋人詩。曠達者徵引老莊。繁縟者徵引班揚。而陶公專用論語。漢人以下。宋儒以前。可推聖門弟子者。淵明也。康樂亦善用經語。而遜其無痕」⁽¹³⁾と言っている。即ち、作品に古典を引用する場合、陶潜は専ら『論語』を用いており、漢から宋までの時代における孔子門下の第一の存在なのだという。そこで最初に陶潜の詩の中から『論語』を用いている「飲酒」を見てみよう。

飲酒 其二

積善云有報 夷叔在西山 善を積めば報有りと云ふも、夷叔は西山に在りき。

吉田健一…初期俳諧における『論語』の摂取について

善惡苟不應 何事立空言 善惡苟くも應ぜずば、何事ぞ空言を立つる。

九十行帶索 飢寒況當年 九十にして行索を帶とす、飢寒況んや當年をや。

不頼固窮節 百世當誰傳 固窮の節に頼らずんば、百世當に誰か傳ふべき。

第七行の「固窮節」は「困窮しても失わぬ君子としての節義」という意味である。出典は『論語』衛霊公第十五にある次の一段である。

衛霊公問「陳於孔子」。孔子對曰、俎豆之事、即嘗聞之矣。軍旅之事、未_レ之學也。明日遂行。在_レ陳絶_レ糧。從者病、莫_レ能興_一。

子路慍、見曰、君子亦有_レ窮乎。子曰、君子固窮。小人窮斯濫矣。

この段の後半に、孔子と弟子たちが諸国流浪の旅の途中、陳の国で糧食が絶え、飢えに苦しんだときに弟子の子路が孔子に「君子もまた困窮することがあるでしょうか」と尋ねると、孔子が「君子も固より窮することはあるが、そんなときでも乱れた振る舞いをする事はない。小人は窮するとすぐに取り乱してしまうものだが」と答えたという話が出てくる。この中からこの典故を象徴する文字として「君子固窮」の「固窮」という二字を抜き取り、これに『論語』のこの場面の本文には出てこないが、節義を意味する「節」の字を付けて詩の中に取り入れたのである。換言すれば、「固窮節」は衛霊公第十五にある典故を引き出すためのキーワードになっている。このようなことを可能にするためには、『論語』を十分に読み込んでその思想や内容を深く理解することが詩人に求められる。

このように、『論語』の章句を詩の中に取り込む場合には、『論語』

のある場面や言葉を典故として取り込むことが多く、論語の章句をそのまま取り込む例は少ない。『論語』を思わせる字句は二字か三字程度に縮約されている。「固窮節」の話も比較的字数数の多い話なのであるが、それがわずか三字にまとめられている。

このことについて、沈徳潜は、「古人引用。多割截者。」⁽¹⁴⁾と言っている。「割截」とは長文の中から一部を裁ち切ることであり、古人が詩等に他の文章の一部を引用する場合、多くは割截即ち裁ち切りという手法によるのだという。

ここで取り上げた陶潜の詩は漢詩の押韻や平仄などの決まりが確立する前の作品であるので、これらについて厳格性は求められない。次に、これらの決まりが確立した後の作品として、漢詩を代表する詩人の一人である杜甫の作品の中から、『唐詩選』において五言律詩に分類されている「登兗州城樓」⁽¹⁵⁾を見る。

登兗州城樓 兗州の城樓に登る

東郡趨庭日 南樓縱目初 東郡庭に趨る日、南樓目を縦にする初め。

浮雲連海岱 平野入青徐 浮雲海岱に連なり、平野青徐に入る。

孤嶂秦碑在 荒城魯殿餘 孤嶂秦碑在り、荒城魯殿餘る。

從來多古意 臨眺獨躊躇 從來古意多し、臨眺獨り躊躇す。

第一行の「趨庭」は「子が父から教えを受けること」という意味で使われるが、元々の意味は庭を小走りに走ることである。出典は『論語』季氏第十六の以下の一段である。

陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰、未也。不學詩、無以言。

鯉退而學詩。他日又獨立。鯉趨而過庭。曰、學禮乎。對曰、未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。問斯二者矣。陳亢退而喜曰、問一得三。聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。

これは、孔子の子の鯉が家の庭を走っていたとき、孔子に呼び止められ、教えを受けたという話で、『論語』の中では比較的長い一段であるが、杜甫はこの話を典故として、その中にある「鯉趨而過庭」という句からこの話を象徴する「趨」と「庭」の二字を裁ち切り、「趨庭」という形にまとめた上で詩の中に取り込んだのである。詩の中で、「趨庭」は典故を引き出すためのキーワードの役目を果たしている。

この詩の形式は五言律詩である。押韻は偶数行末尾の初、徐、餘、踏で、「趨庭」は押韻には関わらない。平仄に関しては、第一行二文字目の「郡」が仄字（去声）なのでこの詩は仄起式となる。『論語』からの引用である「趨庭」を含む第一行の平仄の配列は「東郡趨庭日」であり、仄起式の平仄の配列の決まりを守っている。取り込んだ文字数が二字と短いこともあつて、平仄の決まりに適合させることができたのである。

このように、中国の漢詩による『論語』の取り込みは、『論語』の章句を可能な限り縮約する例が多い。⁽¹⁶⁾

三、初期俳諧と同時期の日本の漢詩による『論語』の引用

次に、初期俳諧と概ね同じ時代、即ち江戸時代初期に日本で作られた漢詩を見る。この時期を代表する日本漢詩人としては、江村北海の『日本詩史』卷之三に「寛文中、詩豪と称するもの、石川丈山、僧元

政に過ぐるは無し」とあるように、この二人を挙げることができる。猪口篤志『日本漢詩』¹⁸にも、「惺窩の門人には林羅山・那波活所・堀杏庵・菅得庵の四天王をはじめ、松永尺五・三宅寄齋の諸大儒を出しているが、詩に於いては独り石川丈山あるのみ」「丈山と拮抗して江戸初期の詩人の冠冕たるものは積元政であらう。……陳元贊や熊沢蕃山と深交があり、詩は清の袁中郎を学んだ」とあるので、この二人を江戸時代初期を代表する漢詩人として取り上げることにする。併せて、『論語集注』に道春点と呼ばれる訓点を施した江戸時代屈指の儒学者である林羅山の漢詩も取り上げることにする。

まず、上野洋三注『江戸詩人撰集 第一巻 石川丈山 元政』¹⁹を基に石川丈山（天正十一年（一五八三）～寛文二年（一六七二））及び僧元政（元和九年（一六二三）～寛文八年（一六六八））の漢詩と『論語』との関わりを見ることにする。

石川丈山作の「即事」（寛文十一年（一六七二）刊『覆醬集』所載）という五言律詩を示す。

即事

掃葉穿松草 養花修菊叢 葉を掃きて松草を穿ち 花を養いて

菊叢を修す

帰鴉天有路 遊蝶囿無風 帰鴉 天に路有り 遊蝶 囿に風無し

し

典籍求三益 痴頑摠五窮 典籍 三益を求め 痴頑 五窮を摠

ぶ

詩斑雖至老 恨不似陵翁 詩斑 老に至ると雖ども 恨むらく

は陵翁に似ざること

ここで「三益」とは「自分にとって有益な三種類の友」のことである。出典は『論語』季氏第十六の「孔子曰、益者三友、損者三友。友_レ直、友_レ諒、友_レ多聞、益矣。友_レ便辟、友_レ善柔、友_レ便佞、損矣」である。その意味するところは、直の人（直言する人）、諒の人（誠実で表裏のない人）、多聞の人（多くの事を聞き知っている人）の三種を友とするのは有益であるということである。『論語』本文においては「友_レ直、友_レ諒、友_レ多聞、益矣」を「益者三友」にまとめているが、丈山の詩はこれをさらに縮約して「三益」と呼んでいる。これは、三種類の有益な友についての『論語』季氏第十六の孔子の教えを想起させるキーワードとなっており、割截型の引用である。

次に、「見懷」（延宝四年（一六七六）刊『新編覆醬集』所載）と題する五言律詩の前半部分を示す。

見懷

僻遠何所樂 澹然無適莫 僻遠 何の楽しむ所ぞ 澹然として

適莫無し

水愛周子蓮 山採龐公葉 水には周子の蓮を愛し 山には龐公

が葉を採る

第二句の「無_レ適莫」の「適莫」は、上野洋三によれば「可と不可、積極と消極などの対の概念」で、「無_レ適莫」はそういったことが無いということになる。出典は『論語』里仁第四の「子曰、君子之於_レ天下也、無_レ適也。無_レ莫也。義之與比」である。丈山はこの言葉から切り取った「無_レ適也。無_レ莫也」を「無_レ適莫」という三文字に縮約²⁰し、詩の中に取り込んだのである。この詩は清の俞樾が編纂した江戸漢詩のアンソロジーである光緒九年（明治十六年、一八八三年）成立

の『東瀛詩選』にも収録されており、中国の漢詩専門家から見ても優れた作品であったようだ。

今度は僧元政の漢詩を見てみよう。まず、「風流」（延宝二年（一六七四）刊『艸山集』所載）と題する七言律詩の前半を見る。

風流

陶令門前春翠長 陶令門前 春翠長し

垂条払地弄斜陽 垂条 地を払って斜陽を弄す

細腰難学仲由舞 細腰 学び難し仲由が舞

軽体聊為曾点狂 軽体 聊か曾点が狂を為す

この中で、曾点は孔子の門人の曾皙（名は点）のことで、「曾点が狂」は孔子が弟子三人に、将来、何をしたいかと問うた後、曾皙に問うと、晩春の気候のよいときに、春の服に着替えて、青年や子供たちと郊外に出かけたり、温泉に入ったり、雨乞い台で夕涼みをしたいという答えが返ってきたという『論語』先進第十一にある故事を典故としている。

この場面の『論語』の本文は「子路・曾皙・冉有・公西華侍坐。子曰、以吾一日長乎爾、母吾以也。居則曰、不吾知也。如或知爾、則可以哉。……點爾如何。鼓瑟希。鏗爾舍瑟而作。對曰、異乎三子之撰。何傷乎。亦各言其志也。曰、暮春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。夫子喟然歎曰、吾與點也」である。元政はこの故事の中から登場人物の一人の名前である「曾点」（曾皙に同じ）を切り取り、かつ彼が理想とした「暮春には、春服既に成る。冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風じ、詠じて帰らん」という生き方を、『論語』のこの場面の本文で

は使われていないが「風狂」を意味する「狂」の字で示し、両者を合わせて「曾点狂」という三文字にして詩の中に取り込んだのである。この手法は『論語』の登場人物の名と本文では使われていない語とを組み合わせたものなので、厳密には割截型の引用とは言えないが、割截型に近い縮約の例と言えると思われる。

次に、前出の「風流」と同じく『艸山集』所載の「暮春登吉田氏園亭」と題する七言律詩を見る。場面は「風流」と同じである。ここでは後半の四句を見てみよう。

暮春登吉田氏園亭 暮春、吉田氏の園亭に登りて

梁下魚遊常樂意 梁下 魚遊びて 常に意を楽しみ

檻前鳥狎永忘機 檻前 鳥狎れて 永く機を忘る

従来我亦風狂客 従来 我も亦風狂の客

春服成時共浴沂 春服成る時 共に沂に浴さん

この詩では「風流」で引かれた先進第十一の話のうち、「暮春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸」というところから「春服成」と「浴沂」とを切り取り、かつ結び付けている。これは「割截」の手法を巧みに利用した例と言える。

最後に、林羅山（天正十一年（一五八三）〜明暦三年（一六五七）の「駿府」（『林羅山詩集』二「癸未紀行」所載）という七言排律を見てみよう。これは、寛永二〇年（一六四三）に大老酒井忠勝・老中松平信綱とともに上洛した際、駿府に至ったときの感慨を詠んだ作品である。この詩は『東瀛詩選』にも収録されている。最初の六行を示す。

駿府

遊事駿州曾十年 駿州に遊事すること 曾て十年

柳営幕下白雲辺 柳営 幕下 白雲の辺

数重疊甍比牢鉄 数重の疊甍 牢鉄に比し

千仞雪風吹御筵 千仞の雪風 御筵を吹く

侍食伝嘗君子賜 食に侍して 伝へ嘗む 君子の賜

讀書常説古人賢 書を読み 常に説く 古人の賢

この詩において、五行目の「君子」は「人民の上に立つて統治する人物」、具体的には第一行の「駿州に遊事すること 曾て十年」の時期に羅山が仕えた徳川家康を指している。

「君子」はその前の行に「風」という字があることから見て、『論語』顔淵第十二の「季康子問政於孔子曰、如殺無道、以就有道、何如。孔子對曰、子爲政、焉用殺。子欲善而民善矣。君子之徳風。小人之徳草。草尚之風、必偃」を出典としている。その中の「君子之徳風」が四行目の「風」と五行目の「君子」に切り分けられた形で取り入れられているのである。この詩による『論語』の取り込みは、出典を巧みに切り分け、かつぎりぎりまで縮約しているので、割截型の引用と言つてよいと思われる。

このように、江戸時代初期の漢詩を代表する石川丈山及び僧元政、更に江戸時代屈指の儒学者である林羅山の作品には、中国の漢詩における『論語』の取り込みのように、その思想・内容を深く読み込んだ上で、その中の典故を縮約した形で引き出す割截型の取り込みに到達している例が多く見られる。

このことに関連して、毛振華「日本漢詩与『論語』」は「従日本漢詩對『論語』章句的受容形式來看、日本漢詩作家已經完全擺脫了對『論語』的機械化攝取形式、由表及裏地學習化用其內在精髓、注重其人生

智慧和思想實質的汲取」と述べている。これは江戸時代初期の日本漢詩に限ったことではなく、日本漢詩全般についての評言であるが、日本漢詩による『論語』の攝取は、その章句を機械的に引き写すのではなく、その思想や内容の精髓をよく理解した上で漢詩の中に取り入れているとしている。石川丈山、僧元政及び林羅山等江戸初期の漢詩人の作品もこの評言のレベルに到達していると思われる。

四、初期俳諧による『論語』摂取の特徴

——江戸時代初期の漢詩による『論語』引用と比べて

まず、前節で取り上げた石川丈山、僧元政及び林羅山の漢詩を基に、初期俳諧と時代が重なる江戸時代初期の日本漢詩による『論語』引用の特徴を述べると、中国の漢詩による『論語』の引用と同様に、『論語』を深く読み込んだ上で、その章句から二〜三字を割截、即ち裁ち切つて詩中に取り入れることが多い。これは、漢詩を作る人たちは他の作者が作った漢詩の読者になることが多く、互いに共通の知識基盤の上に立っているので、『論語』の話の中から象徴的な語や文字を裁ち切つて提示すれば、読む側はどの話のことかが分かったことによるであろう。また、詩の中に取り込まれた字句は『論語』中の典故や孔子・高弟たちの言葉を引き出すキーワードの役割を果たしていることは既に確認した。

中国の漢詩による『論語』の取入れにも見られることであるが、詩の中に取り込む字句を極限まで短くしたのは、取り込む字句が長くなればなるほど、押韻や平仄といった漢詩の規則に合わせる事が難しくなることも挙げられると思われる。ただし、中国の漢詩、江戸時代

初期の漢詩のいずれにも『論語』の本文通りに長めに取り込んだ詩もあったが、これは少数例である。

一方、初期俳諧における『論語』の撰取においては、その中の典故を出来るだけ縮約するという割截型の取り込みは見られず、多くは読み下し文の一部をそのままの形で、あるいは少し手を加えただけの形で取り込むことになる。読み下し文の中には音読みの漢語と訓読みの和語が含まれることになるが、取り込み際に際してはどちらも利用された。

音読み語、訓読み語のいずれを取り込むにしても、『論語』の思想・内容を深く理解することは求められず、作品に「おかしみ」を生み出すために『論語』中の故事や言葉（特に、音読み語である漢語）が利用された。

ただし、和歌や連歌との連続性も意識されており、そのことは『論語』から取り込んだ語を掛詞として用いることや縁語にするという点に示された。ただし、掛詞として用いた場合は、「夕にはしす共蚊なり夏のむし」「うむことをはばかり中にはらむらし」というように、『論語』中の元々の字とは別の字が使われたり、章句の本来の意味から離れたたりすることもあった。これは、初期俳諧自体が言葉遊び的な性格を持っていたことの一つの現れとも言えよう。

いずれにしても、初期俳諧における『論語』の撰取は毛振華「日本漢詩与『論語』」に言う「對『論語』的機械化撰取形式」、即ち『論語』の章句の機械的な引き写し、或いはそれに若干の味付けした段階に留まるものであったと思われる。

おわりに

初期俳諧においては、同時期の日本漢詩と比べ、『論語』からの取り込みはまだ底の浅いものであったと思われる。やがて初期俳諧を脱し、蕉門の時代が進むにつれて、章句の意味を深く理解し、かつ江戸時代初期の漢詩人による取り込みのように練り上げた形で『論語』を取り込むようになっていった。ここに一つ、其角の句を挙げておこう。

傾城の賢なるは此柳哉（『五元集』⁽²⁴⁾）

この句は学而第一の「子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身」の中の「賢賢易色」を踏まえている。「賢」はこの句においても音読み語（漢語）として「けん」と読まれており、もう一つの音読み語である「傾城」（けいせい）とよく響き合っている。

この句を初期俳諧の「賢を色にかへて妻こふや子夏の声」及び「色にかへよ賢を賢として四方の山」の句と比べると、その違いは歴然としている。前の句の「子夏」が「鹿」を掛けていることを除けば、両句とも「子夏曰、賢賢易色」の読み下しをなぞっただけである。これと違って、其角の句では学而第一のこの章句と直接関連のあるのは「賢なる」だけであるが、「傾城」からその縁語と言ってよい「色」という言葉が想起されるので、『論語』の「子夏曰、賢賢易色……」から「賢」を切り取って引用していることが分かる。

さらに、注目すべきはこの句においては割截型の取り込みのほかに、掛詞や縁語も用いられていることである。即ち、「傾城」との関連で、それに続く「賢なる」は女性のあでやかさを意味する「妍なる」の掛

詞となっている。しかも、遊郭（色町）の堀の土手に植えられること
の多い「柳」も詠みこまれており、この「柳」からは柳眉や柳腰といっ
た語が浮かび、「妍なる」と相俟って傾城の美しい眉やしなやかな腰
つきが連想される。つまり、ここでは「傾城」「妍なる」それに「柳」
は縁語の関係になっている。

「子夏曰、賢賢易色……」は元々は難解かつ観念的な内容であるが、
其角はそこに込められた内容を深く読み込み、割截型の手法で句に取
り込んでいる。この点において江戸時代初期の日本漢詩における『論
語』の取り込みに比肩しうると同時に、初期俳諧が得意とした掛詞や
縁語も活用した巧みな作り方となっていると思われる。

参考文献

- (1) 『崑山集』は慶安四年（一六五二）刊。本論文で引用する句は主に「古
典俳文学大系」（集英社 一九七二年）及び「日本俳書大系」（日本俳書
大系刊行会 一九二六年）の各刊本所収のものによる。引用に際し、古
典ライブラリー「日本Web図書館」による番号を付す。
- (2) 野間光辰監修『俳諧類船集』（近世文藝叢刊）第一巻 般庵野間光辰
先生華甲記念会 一九六九年）による。
- (3) 『新編国歌大観第一巻勅撰集編 歌集』（角川書店 一九八三年）所収
のものによる。
- (4) 『論語』の本文は、特に断りのない限り、吉田賢抗『論語』（新釈漢文
大系1）明治書院 一九六〇年）による。この「有朋自遠方来」の読み
方については、古注本である建武四（一三三七）年清原頼元点巻一（六）、
康永元（一三四二）年清原良兼点（巻七）十の『建武鈔本論語集解』（大
東急記念文庫蔵『論語集解』の複製本である蒲田清次郎編『建武四年鈔
本論語』（一九三九年）による）には「有朋自遠方来」とあり、
また新注本の桂庵玄樹点『元龜抄本論語』（東京都立図書館蔵。青淵論

吉田健一…初期俳諧における『論語』の摂取について

語文庫（青89）『元龜抄本論語』存三卷（巻一・二・十）。巻之一及び二の
奥書に「元龜四年癸酉三月廿八日書之 春永筆」とある）には「有朋
自遠方来」とあり、いづれも「朋遠方より来れることあり」と読み
下すと思われる。

(5) 宗祇に「花匂ふ梅は無双のこずゑかな」で始まる漢語を詠み入れた『宗
祇暈字百韻』がある。これは、安原貞室編、明暦二（一六五六）年刊の『玉
海集』に収録されているが、その前書きに「ある人の所望にて暈字の誹
諧独吟に百句せし時」とあるように、連歌ではなく、俳諧と位置付けら
れている。

- (6) 『岩波講座 日本文学史』第7巻「変革期の文学Ⅱ」（岩波書店
一九九六年）一一三～一四ページ
- (7) 呉美寧「室町末期・江戸初期の論語集注本における古注の影響
——元龜本・寛永本・寛文本を対象として——」（『訓点語と訓点資料』
／訓点語学会編一〇七号 二〇〇一年九月）一九～三五ページ
- (8) 『論語集解』は魏の何晏の撰。二四八年成立。次行の『論語集注』は南
宋の朱熹の撰。『四書集注』の一つ。一一七七年成立。
- (9) 『足利本 論語抄』は中田祝夫編『足利本 論語抄』（勉誠社一九七二年）
による。本書の成立時期については三九四～三九七ページにおいて言及
されている。
- (10) 俳書ごとに見てゆくと、『論語』を取り入れたと見られる句が出現する
頻度は高くはない。例えば、『正章千句』の中で『論語』と関連がある
と思われるのは、「職のいとまもとむる夜半の銭湯に（君子食無求飽、
居無求安（学而第一））」「賢になど春のうら、は馴れざらん（賢賢易色（学
而第一））」「親類の遠くに居るは呼のほせ（有朋自遠方来（学而第一））」「
つれづれと隠居所の花守りて／賢やたのしむ春の山中（賢賢易色（学
而第一））」の四句ほどであり、他の俳書も同程度である。『論語』から
の語を訓読み語、音読み語に分けると、音読み語（漢語）を取り込んだ
例が多い。
- (11) 松山玖也編『桜川』は延宝二年（一六七四）刊。翻刻版の『桜川』（財
団法人大東急記念文庫 一九六〇年）及び加藤定彦解説『桜川上巻』（財
団法人大東急記念文庫 一九八五年）によった。なお、数字は巻頭句か

ら数えて何番目の句かを示す。

- (12) 清の沈徳潜撰。一七一九年成立。ここでは、本文は『古詩源』（中国古典文学基本叢書）中華書局 一九六三年）と星川清孝『古詩源 下』（漢詩大系5）集英社 一九六五年）とにより、読み下しは『古詩源 下』による。
- (13) 沈徳潜撰『古詩源』（中国古典文学基本叢書）中華書局 一九六三年）一七二ページ
- (14) 同書二三八ページ。なお、「割截」の語義について、諸橋轍次『大漢和辞典 卷二 修訂版』（大修館書店 一九八四年）に「たちきる。〔論衡、對作〕割截横拓」とある。
- (15) この詩及び次注の「丹青引贈曹將軍覇」は目加田誠『唐詩選』（新釈漢文大系19）明治書院 一九六四年）による。
- (16) ただし、中国の漢詩にも『論語』本文の章句をほぼそのまま取り込んだ例も少数ながら見られる。杜甫の「丹青引贈曹將軍覇」（丹青の引曹將軍覇に贈る）と題する七言古詩もその一つで、その第七行の「丹青不知老將至（丹青知らず老の將に至らんとするを）」は、『論語』述而第七の「葉公問孔子於子路。子路不_レ對。子曰、女奚不_レ曰。其爲_レ人也、發_レ憤忘_レ食、樂以忘_レ憂、不_レ知_レ老之將_レ至云爾」の一部をほぼそのまま利用しており、第八行の「富貴於我如浮雲」（富貴我に於て浮雲の如し）は、同じく述而第七の「子曰、飯_レ疏食、飲_レ水、曲_レ肱而枕_レ之。樂亦在其中_レ矣。不義而富且貴、於_レ我如_レ浮雲」をほぼ同じ形のまま取り入れている。
- (17) 『日本詩史・五山堂詩話』（新日本古典文学大系65）岩波書店 一九八一年）所収の大谷雅夫校注『日本詩史』八八ページによる。
- (18) 猪口篤志『日本漢詩 上』（新釈漢文大系45）明治書院 一九七二年）二八～二九ページ
- (19) 上野洋三注『江戸詩人撰集 第一卷 石川文山 元政』（岩波書店 一九九一年）文山及び元政の詩の読み下しは本書による。
- (20) ただし文山の漢詩にも割截型と違ってほぼ本文通りに取り込んだ例もある。『覆醬集』所載の「答春徳」という七言古詩に「居仁由義崇先哲 仁に居り義に由りて先哲を崇い 切問近思伝若翁 切問近思 若翁に
- 伝う」という一節があるが、句中の「切問近思」は『論語』子張第十九の「子夏曰、博學而篤志、切問而近思。仁在其中_レ矣」の中の「切問而近思」をほぼ同じ形で取り込んでいる。
- (21) 清兪樾撰・佐野正巳編『東瀛詩選』（汲古書院 一九八一年）による。
- (22) 読み下しは菅野禮行・徳田武校注、訳『新編日本古典文学全集86 日本漢詩集』（小学館 二〇〇二年）二五二～二五三ページによる。
- (23) 毛振華『日本漢詩与《論語》』（孔子研究）二〇一五年第三期 中国孔子基金会 二〇一五年五月）八五ページ。簡体字表記を繁体字表記に改めた。
- (24) 『五元集』は延享四年（一七四七）刊。ここでは大野洒竹校訂『俳諧文庫 第四編 其角全集』（博文館 一九八八年）所収のものによる。

（よしだ けんいち／日本近世文学）